

創造へ、そして失敗

ここにその妹（いも）伊耶那美の命に問ひたまひしく、
「汝（な）が身はいかに成れる」と問ひたまへば、答
へたまはく、「吾が身は成り成りて、成り合はぬとこ
ろ一処（ひとところ）あり」とまをしたまひき。ここ
に伊耶那岐の命詔りたまひしく、「我が身は成り成り
て、成り余れるところ一処あり。

／解説／

古事記神話が先天十七言霊全部の出現で人間精神の先天の構造がすべて明らかとなり、言霊学を解説する視点が先天構造から後天構造へ下りて来ました。ここで後天現象の単位である現象子音言霊の誕生の話に移ることとなります。先にお話しましたようにアオウエ四母音とチイキミシリヒニハ父韻の結びで計三十二の子音誕生となる訳ではありますが、古事記はここで直ぐに子音創生の話に入らず、創生の失敗談や、創生した子音が占める宇宙の場所（位置）等の話が挿入されます。古事記の神話が言霊学の原理の教科書だという事からすると、何ともまどろこしいように思えますが、実はその創生の失敗談や言霊の位置の話が言霊の立場から見た人類の歴史や、社会に現出して来る人間の種々の考え方、また言霊学原理の理解の上などで大層役立つ事になるのであります。その内容は話が進むにつれて明らかとなって行きます。

【吾が身は成り成りて、成り合はぬところ一処あり】

子音創生の話、古事記は人間の男女間の生殖作用の形という謎で示して行きます。男女の交合とか、言葉の成り立ちとかは人間生命の営みの根元とも言える事柄に属しますので、その内容が共に似ている事を利用して、子音創生を男女交合の謎で上手に指し示そうとする訳です。

伊耶那岐の命が伊耶那美の命に「汝が身はいかに成れる」と問うたのに対し、美の命が「吾が身は成り成りて、成り合わぬ

ところ一処あり」と答えました。「成る」は「鳴る」と謎を解くと言霊学の意味が解ります。アオウエ四母音はそれを発音してみると、息の続く限り声を出してもアはア—であり、オはオ—と同じ音が続き、母音・半母音以外の音の如く成り合うことはありません。その事を生殖作用に於ける女陰の形「成り合はぬ」に譬えたのであります。

【我が身は成り成りて、成り余れるところ一処あり。】

「我が身」とは伊耶那岐の命の身体という事で言霊イを意味するように思われますが、実際にはその言霊イの働きである父韻チイキシリヒニのことを指すのであります。この八つの父韻を発音しますと、チの言葉の余韻としてイの音が残ります。即ちチ—イ—イ—と続きます。これが鳴り余れる音という訳です。この事を人間の男根が身体から成り余っていることに譬えたのであります。